

水産用医薬品再評価事業*

竹内 照文・服部 未夏

目 的

養殖魚の細菌性疾病の治療には多くの水産用医薬品が使用されているが、これらの使用に対しては対象魚種が指定され、使用上のネックになっている。

そこで、使用対象魚種を拡大する資料として魚種と水産用医薬品の組み合わせにより薬剤投与試験を実施し、水産用医薬品の魚体内における残留について調査を行う。

なお、本事業は(社)日本水産資源保護協会からの委託事業であり、本年度はカンパチとビコザマイシンの組み合わせで実施した。

方 法

試験は目良湾内の当面海面試験生簀(3×3×3 m)で飼育中のカンパチ0才魚(平均体重510 g)を用いて1998年12月20日から2週間予備飼育した後、1999年1月4日から開始した。ビコザマイシン(商品名ピコマリン:ビコザマイシン 50mg/g含有)は常用最高投与量の2倍量を配合飼料に添着して5日間投与し、その後、通常飼育(1日1回飽食)し、以下の設定で試料を採取した。

医薬品投与開始1日前	1月4日
医薬品投与期間終了1日後	1月10日
休薬期間終了1日前	2月4日
休薬期間終了日	2月5日
休薬期間終了1日後	2月6日

なお、各時期ごとにカンパチを5尾ずつ取り上げ、分析用試料として筋肉を各50 gずつ採取し、(財)日本食品分析センターにて薬剤の残留について分析した。

結 果

試験の設定が低水温期ということで、1月から2月にかけて行った。水温は試験開始当時16、17℃台であったが、その後下降し続け、12℃台になった。カンパチは斃死することがなく、正常な状態で試験が実施できたが、低水温のため摂餌は活発でなく、生け簀の中、底層で緩やかに摂餌していることが確認された。

薬剤は根気よく摂餌させたことにより、医薬品の投与期間1日後には3.8 μg(力価)/g検出されたが、休薬期間終了1日前と終了日には1/8~1/10に減少し、休薬期間終了1日後には検出されなくなった(表1)。

表1 試験結果

採取時期	平均魚体重 g	ビコザマイシン μg(力価)/g
医薬品投与開始1日前 (1999年1月4日)	503	ND
医薬品投与期間終了1日後 (1月10日)	491	3.8
休薬期間終了1日前 (2月4日)	462	0.5
休薬期間終了日 (2月5日)	597	0.35
休薬期間終了1日後 (2月6日)	519	ND

*水産用医薬品再評価事業費による。